

## 子どものためのタンバリン奏法研究

— 音色とリズムの組み合わせに着目して —

### A study of the tambourine method for children

— focused on the combination of timbre and rhythm —

山 本 晶 子

YAMAMOTO Akiko

キーワード：タンバリン，リズム，音色，奏法，子ども

Keywords: Tambourine, Rhythm, Timbre, Playing style, Children

タンバリンは，世界中でさまざまな音楽に用いられている。オーケストラや吹奏楽などの合奏はもちろん，教育楽器として幼稚園や小学校で早期の音楽教育に導入され，大人の音楽サークルやカラオケなどでも使われている。また，舞踊の中に取り入れられるなど用途が広く，幅広い年代の人々に馴染みのある楽器である。

本研究では，タンバリンの奏法と音色との関連性について考察し，児童が身体の動きを通して実感を伴いながらタンバリンの音色をつくっていくための奏法を具体的に示すとともに，それによって子どもの豊かな表現力を伸ばす可能性について論じた。

#### はじめに

タンバリンは膜鳴楽器に属するが，皮を打つと同時に鈴が鳴る効果も得られることから，振奏体鳴楽器の要素も備えている。大きさは直径 20 ～ 30cm ぐらい，深さ 5 ～ 8cm ぐらいのものが多く，フープと呼ばれる木製の円形の枠には，周囲に細長い 5 ～ 15 個の穴が 1 列あるいは 2 列で平行に開いており，そこに直径 4 cm ぐらいの金属製の小さな薄いジングル（金属製の円盤）が 2 個 1 組で心棒にゆるく通されている。枠の片面に羊皮や牛皮，あるいはプラスチック製の皮が張られ，皮は鉋止めのものが一般的であるが，ロッドを用いてねじで締めるものもある。ジングルのないものは「ハンドドラム」または「フレームドラム」とも呼ばれ，皮を張っていない「モンキータンバリン」もある。

タンバリンは英語では tambourine，独語では Tamburin と表記される。我が国では英語読み「タンバリン」という呼び方が一般的であるが，文部科学省が発行している「教育用音楽用語」に「タンブリン」と表記されているため，教科書はそれに従っている。タンバリンの古称である「ティンブレル (timbrel)」はアッシリアやエジプトといった古代の国々で使われ，中世後期の宗教的な彫刻や壁画にしばしば描かれている。その後，カスタネットとほぼ同時期に，タンバリンもスペインや南イタリアの踊子がタランテルラなどの郷土舞踊を自ら伴奏する楽器として使われるようになった。18 世紀ごろには，トルコの軍楽隊に影響

されてふたたびヨーロッパに広がり、20 世紀には打楽器一般の用法が多彩化することで多くの音楽場面で使われるようになった。管弦楽での用いられ方は、オリエント系の打楽器表現や、南ヨーロッパの郷土色を表すための使用が目立つ。Table 1 は、その代表的な楽曲である。

Table 1 タンバリンを使用する楽曲の代表例 Well-known works using tambourine

| 作曲年  | 作曲家                       | 曲名                              |
|------|---------------------------|---------------------------------|
| 1779 | Christoph Willibald Gluck | Echo and Narcissus              |
| 1787 | Wolfgang Amadeus Mozart   | Six German Dances, K.571        |
| 1821 | Carl Maria von Weber      | Preciosa, Op.78                 |
| 1838 | Louis Hector Berlioz      | Benvenuto Cellini Op.23         |
| 1879 | Georges Bizet             | L'Arlésienne Suite No.2         |
| 1885 | Georges Bizet             | Carmen Suite No.1 [Aragonaise]  |
| 1888 | Rimsky-Korsakov           | Scheherazade, Op.35             |
| 1891 | Antonin Dvorak            | Carnival Overture, Op.92        |
| 1892 | Peter Ilyich Tchaikovsky  | The Nutcracker [Trepak]         |
| 1905 | Richard Strauss           | Salome-Dance of the Seven Veils |
| 1911 | Igor Stravinsky           | Petrushka                       |
| 1916 | Gustav Holst              | The Planets, Op.32              |
| 1913 | Igor Stravinsky           | The Rite of Spring              |

日本の学校教育でタンバリンが広く使われ始めたのは戦後になってからである。それまで音楽教育の主流であった歌唱に加え、器楽演奏にもより重点が置かれるようになり、1947 年の学習指導要領音楽科編（試案）で「音楽の知識や技術を習得して音楽美の理解・感得を十分にするためには、自分自身が「音楽する」ことが何よりも大切であるということから、ミハルス、カスタネット、トライアングルとともに、タンバリンも音楽教育に取り入れられるようになった。学習指導要領では、「リズム反応」として器楽教育の中に打楽器が多用された。また、簡単な構造で奏法も取り扱いも容易であることから、タンバリンは幼稚園や小学校の音楽指導に使用され、合奏に用いても効果的であるため、教育用楽器として重要な位置を占めるようになり、現在に至っている。



Figure 1  
Tambourine with  
colorful ribbon

現在、日本で販売されているタンバリンの中には、Figure 1 のようにリボンがついているものもある。カラフルな紐がタンバリンを演奏する際に揺れることで動きが強調され、見た目にも華やかである。

これはタンバンの発祥がイタリア、スペインの民族楽器として使われたことや、祝い事の際などに女性が華やかに踊りながら叩いていた歴史の名残であると考えられる。

## 1 タンバリンの奏法について

Figure 2 のようにジングルのない部分を持ち、利き手で打つのが基本である。多くのタンバリンには杵の側面に穴がついているが、（この穴はスタンドに取り付けるためのものであり、親指を入れるためのものではない。）この穴に親指を入れると強く叩いた時に指を怪我する可能性がある。ジングルのない、穴のある場所の皮面を親指でしっかり押さえ、残った4本の指でしっかり杵を握り（Figure 2）、利き手の側がやや下になるよう少し斜めに腹の位置（肩が不自然に上がらず無理なく打てる位置）に構える（Figure 3）。

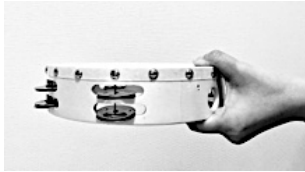


Figure 2  
How to hold



Figure 3  
Position to hold

基本奏法には、以下のように a. 打つ, b. 振る, c. 擦る, の3通りがある。

### a. 打つ





Figure 4  
Where to hit







小さい音やリズムカルな音形の時には、指を少し丸くしてしっかり揃え、指先で杵の上を手首のスナップをきかせて打つ（Figure 4- ①）。大きい音の時には、中央部分を手のひらやこぶしで打つこともある（Figure 4- ②）。中心に近いほど太鼓の音が生かされ、杵に近いほどジングルの音が響く。とても小さい音を出す時には、手首を皮面の上に置き、中指や人差し指で演奏したり、楽器ごと腕に抱えこんで打ったりもする。また、薬指、中指、人差し指、親指の順に、指を折り曲げながらはじく奏法もある。これらは、速いパッセージを演奏するとき効果的である。

タンバリンの膜面の角度を水平にするとジングルが横の状態になるので、歯切れの良い短い音になる。逆に垂直にすると、ジングルのみが響く。リズムによって角度の傾き方を使い分けることで残響を調整することができる。

Table 2 打つ奏法 How to play: hit

|   |   |  |
|---|---|--|
| 1 | 手のひらで皮面の中央を打つ<br>皮を打つ音色とジングルの音色の両方の響きで、芯のある音色が得られる。タンバリンの角度によってジングルの響きの量、長さを調節することもできる。 |  |
| 2 | 手のひらで皮面の中央を打ち、向こうに倒す<br>手のひらで打った瞬間に向こうへ倒すことで加速がつき、強い音になる。大きな腕の動きを伴うので、視覚的にも効果がある。       |  |

|    |   |  |
|----|---|--|
| 3  | <p><b>5本の指先で皮面の中央を打つ</b></p> <p>皮の音色とジングルの音色の両方を得られるが、手のひらで打ったときよりも、皮の音色が鋭くなることとジングルの反応が少し減り、音の輪郭が立ち、アクセントやスタッカートに効果的である。</p> |    |
| 4  | <p><b>5本の指先で皮面の中央を打ち、向こうに倒す</b></p> <p>手のひらで皮面の中央を打ち向こうに倒したときよりも、ジングルの反応が減って音が短くなり、音量も少し抑えられ音の輪郭がはっきりする。</p>                  |    |
| 5  | <p><b>こぶしで皮面の中央を打つ</b></p> <p>手のひらや指先で打つときよりも、皮の音とジングルの反応が良いので、芯のある音色が得られる。上の1～4よりも、アクセントをつけやすい。</p>                          |    |
| 6  | <p><b>中指&amp;薬指をくっつけ、杵の上を打つ</b></p> <p>杵の上を打つことで、皮の音はほぼなくなり、ジングルの反応も良いので、粒立ちがはっきりする。単発や連打などでよく使われる。</p>                       |    |
| 7  | <p><b>親指で杵の上を打つ</b></p> <p>6で示した中指&amp;薬指と交互に打つことで、細かい音符を刻むことを可能にするテクニック。〈カルメン〉や〈くるみ割り人形〉などのテンポの速い部分に用いられる奏法。</p>             |    |
| 8  | <p><b>手首を皮面に乘せた状態で、中指&amp;薬指をくっつけ、杵の上を打つ</b></p> <p>手首を皮面の上に乘せているため、皮の響きがなくなり、ジングルと木杵の音が鳴る。粒立ちがはっきりして、小さな音が安定する。</p>          |  |
| 9  | <p><b>手首を皮面に乘せた状態で、薬指か中指または人差し指で杵の上を打つ</b></p> <p>小さな音で細かい音符を刻むときに音量を安定させることができる。3本の指を薬指、中指、人差し指の順に打つことで細かい音符を演奏することができる。</p> |  |
| 10 | <p><b>小指以外の4本の指で杵の外側へ向けてはじくように打つ</b></p> <p>細かい音符で音量がほしいときには、小指以外の4本の指で杵の外側へはじくように打つ。指を順次組み合わせて連続させると速く叩くことができる。</p>          |  |


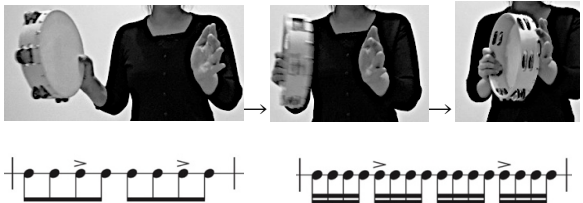

|    |   |  |
|----|---|--|
| 11 | 縦に持ち、皮面の中央を手のひらで打つ<br>タンバリンを縦に持つことで、ジングルの動きがゆるくなり、長めの響きが得られる。また、皮の打音もソフトになる。スレイベルのような音色や柔らかい音色で演奏したいときに効果的。               |    |
| 12 | 縦に持ち、皮面の杵から手のひらが半分出る状態で打つ<br>手のひらの手首側の半分ほどの部分を皮面と杵に当てる。手首の近くの固い部分が皮面に当たることで打音をくっきりさせる。8 ビートや 16 ビートの振る動作と組み合わせて使われることが多い。 |    |
| 13 | 裏返して持ち、5本の指先で皮面の中央を打つ<br>タンバリンの裏側を打つことと、表面を膝に当てることでリズムを刻む方法。大きな音を出すことができ速く叩けるが、正確に刻むことは難しい。                               |    |
| 14 | 裏返して持ち、こぶして皮面の中央を打つ<br>13 よりも皮の打音がはっきりする。表面を膝に当てることと組み合わせて交互に打ったり、裏面のみを打ったりして、細かいリズムを安定した大きな音で演奏できる。                      |    |
| 15 | 膝の上に裏返して乗せ、杵の上に両手首を置いて、中指または薬指で杵の上を打つ<br>皮面が消音されるため、杵を指で打つ音と、いくつかのジングルの音色のみが響く。両手を使えるので、細かい音符を安定して打つことができる。               |   |
| 16 | 膝の上に裏返して乗せ、杵の上に両手首を置いて、薬指または中指か人差し指で杵の上を交互に打つ<br>1本ずつ指で杵の上を打つ。両手の指を適宜に組み合わせて交互に打つことでトレモロのような繊細なリズムで演奏することができる。            |  |

## b. 振る

振る奏法は、8 ビートや 16 ビートを刻むときや、ロールを演奏するときに使われる。ポップス系の曲などでは、タンバリンを縦に持って、横に振ることが多い。リズムに合わせて手や体に打ちあてながら振る。皮のないモンキータンバリンが使われることも多い。

ロール奏法の際には、タンバリンを持った腕を軸にして小刻みに回転させる方法と、楽器全体を小刻みに振る方法がある。さらに、その両方を組み合わせる細かいロール奏法もある。肩より上の位置で振ると大きな音、肩より下の位置で振ると小さい音で演奏できるので、強弱によって振る位置を変えるとよい。小刻みに回転させる際には手首を柔らかくして振り、ロールをするときに膜面を打ってから振るとアクセントをつけることもできる。ロール奏法をする際には、ジングルが均等に振動するように演奏することが大切である。

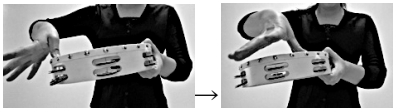
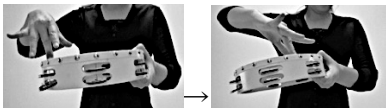
Table 3 振る奏法 How to play: shake

|   |  |  |
|---|--|--|
| 1 | <p>タンバリンを縦に持ち、左右に振る</p> <p>ジングルが左右に往復することで均一な音色が得られる。</p>  |  |
| 2 | <p>左右に振りながら反対の手で打つ</p> <p>8 ビートや 16 ビートのときに使う奏法。タンバリンを縦に持ち、テンポに合わせて音符の刻みで真横に振る。アクセントのところでもう片方の手で皮面を打つ。</p> |  |
| 3 | <p>腕を軸にして回転させる</p> <p>ドアノブを回すときのように腕の延長線上にあるタンバリンの中心を軸にして回転させる。</p>  |  |



### c. 擦る

ロールを演奏する奏法のひとつにフィンガーロールがある。利き手の親指を湿らせて指は立て気味にし、黒板にチョークを立てて点線を描くときの要領で、膜面の縁を円周に沿って擦ることでジングルの響きを持続させる。中指で擦ると粒の細かいロールになる。擦る距離を調整して音符の長さを表現することができる。タンバリンの膜面の傾きを垂直にすると小さな音のロールになる。クレッシェンドする場合には角度を垂直から次第に水平にしていったり、下から徐々に上に持ち上げたりすると効果的である。親指のロールにするか中指のロールにするかで音楽のニュアンスが異なる。

Table 4 擦る奏法 How to play: rub

|   |  |  |
|---|--|--|
| 1 | <p>水平に持って、親指で擦る</p> <p>親指に力をいれ、皮面の枠の上を反時計回りに擦るとジングルが反応してトレモロになる。</p> |  |
| 2 | <p>水平に持って、中指で擦る</p> <p>親指で擦った時よりも中指の方がより細かいロールが得られる。</p>             |  |




|   |  |  |
|---|--|--|
| 3 | 縦に持って、親指または中指で擦る<br>水平の時よりもジングルの反応が少ないため、小さな音でのロールを演奏しやすい。 |  |
| 4 | 5本の指の爪でタンバリンをこする<br>あまり使われない奏法だが、皮面に爪が当たって擦れる小さな音を得られる。    |   |

## 2 効果的な楽譜の示し方について

楽譜には音符などの記号が書かれているが、楽器の持ち方や演奏の仕方については基本的に奏者に任されている。小中学校の音楽の授業で打楽器を用いる際にも、いろいろな奏法で児童生徒が音量や音色のバリエーションを体感することができる。指導書の一部に見られるように、教科書や教育用の楽譜においても、演劇の脚本の「ト書き」のように奏法の説明や音楽の表情などを書き入れることで、視覚的に奏法を理解できるようになり、子どもが主体的に音色を探したり、リズムを工夫したり、自由な音楽づくりをすることに活用できる。打楽器による音楽表現は、「打つ（叩く）」という奏法だけをとってもさまざまな可能性がある。音楽のニュアンスの違いによる音色の変化を主体的に表現するために、この「ト書き楽譜」は有効ではないだろうか。

例えば、マウリシオ・カーゲル（Mauricio Kagel 1931-2008）の〈Concert piece for timpani and orchestra（1992）〉では曲の最後にティンパニ奏者がティンパニに頭を突っ込んだイラストが「紙のヘッドを張った6台目のティンパニを最大限の力で打ち、身体ごと腰まで楽器の中に突っ込み、そのまま止まる」という説明がイラストとともに示されている。

1) Mit aller Wucht auf die Papiermembrane der VI. Pauke schlagen und sogleich bis zur Taille im Kessel des Instruments verschwinden. Verharren.  
Strike with the utmost force on the paper membrane of the VIth timp., in the process disappearing down to the waist in the body of the instrument. Freeze.



[Wirbel ad lib.]  
[roll ad lib.]

gliss.

lunga.

1)

I: → Bb → Eb → D4

fff

fff

fff

Figure 5 Mauricio Kagel: Concert Piece for timpani and orchestra (1992)<sup>1)</sup>

また、エドナ・メイ・バーナム (Edna-Mae Burnam 1908-2007) のバーナム・ピアノテクニック〈A DOZEN A DAY (1975)〉では、指の動きや音形のイメージが棒人形で表現されている。棒人形のイラストがあらわす「動き」に関連づけられた運動感覚を音にして、導入期から音楽的な表現力を身につけていく教材として多くの子供たちに使われている。

1回目 *legato* レガート (なめらかに)  
2回目 *staccato* スタカート (はぎれよく)


いつも2回目のスタカートの練習はスタカートできる音符だけにしましょう。2分音符や全音符などは、スタカートをつけない方が良いでしょう。



拍はきちんと数えて音のつぶをそろえ、むらなくひきましょう。



Figure 6 1 歩こう, 走ろう<sup>2)</sup>






Figure 7 11 難問題<sup>3)</sup>

このような「棒人形」や「ト書き」入りの楽譜は、言葉だけで表すよりも音形のイメージや奏法などを示しやすい。これを打楽器に置き換えて、小学校4～6年生が4～40名でタンバリンを演奏するアンサンブル曲の楽譜を作成した。この曲にはタンバリンを打つ奏法と振る奏法があるが、打つときの手の位置が頭の上、顔の前、しゃがんで打つ、裏返して膝で打つ、こぶしで皮の裏面を打つ、ひじで打つ、おしりで打つなど細かい指定がある。また、タンバリンの面に対して杵の上を打ったり、皮の中央を打ったりもする。振る位置も同様である。そして、全員でポーズをとったり、波を表現したりといった動きも入る。タンバリンを打つときの体全体の動き、手の位置、全員のフォーメーションを伝える手段として、奏法は写真で表し、身体全体の動きは棒人形で示した。



# ハピネス・タンブリーナ

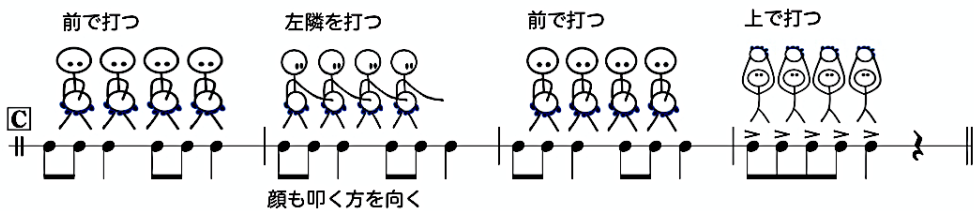
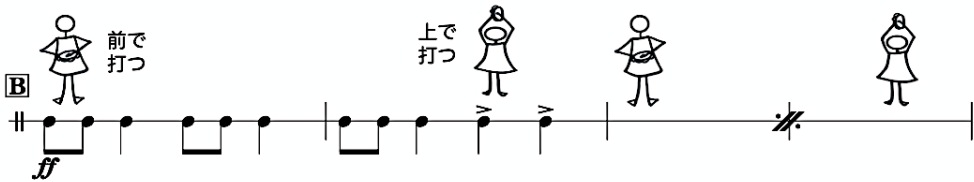
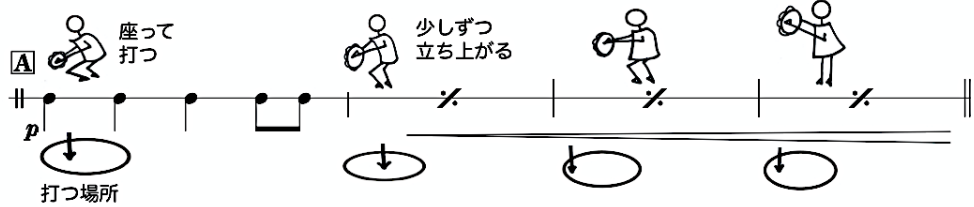
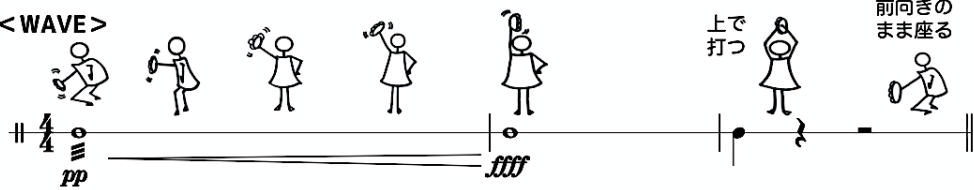
作曲 山本晶子

タンバリンを右手に水平にして（ジングルが鳴らないように）持ち入場。

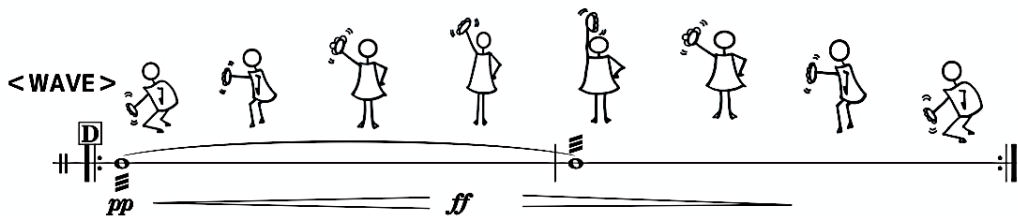
演奏位置に着いたら後ろ向きに座る。

一番右の人から順に振りながら前を向きつつ次第に上へ。

## <WAVE>

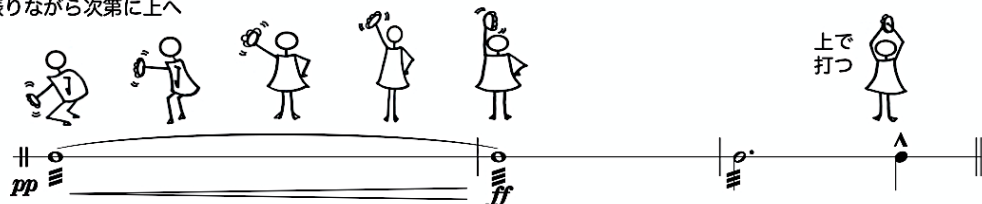


一番右の人から順に振りながら次第に上へそしてまた下へ。



隣の人が動き始めたのを確認したら、自分も立ち上がり、同じようにまた座る

また一番右の人から順に  
振りながら次第に上へ



<裏打ち>

[E]



裏返して  
手とひざを  
交互に打つ

前で  
打つ



A B A B A B A B A B

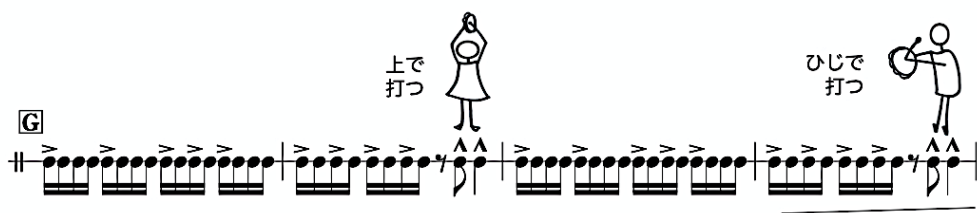
A B A B A B

<16ビート>

[F]



アクセントのときに叩く。  
それ以外は横に振る。



お尻で  
打つ



ポーズ!



## 課題と今後の展望

演奏は音と動きによって聴衆の聴覚と視覚に訴えるものである。楽譜は音価や音量を情報として表わすことができるが、その奏法の細部まで伝えることはできない。演奏者が自由な発想で音を紡ぐためにも、楽譜の情報は最低限必要なものである方がいい。しかし、これを児童向けのものとして考えたとき、奏法や身体の動きのイメージをわかりやすく示して、音色や奏法を工夫するヒントとなる情報を示すことで音楽づくりを楽しむことができるのではないだろうか。タンバリンという楽器ひとつでありながらも、打つ部位は、指先、指全体、指の本数、掌、肘、腿、膝、尻などたくさんあり、打つスピード、持つタンバリンの角度や動きによって音色の変化が大きい。また、1人で演奏するときと複数人で演奏するときとは音量や見え方が違い、それによっても表現の幅が広がる。音楽をつくる楽しみ、アンサンブルの楽しさなどを通じて、自ら考える力を養うことにもつながるだろう。タンバリンという身近な楽器を用いることで児童が音楽の楽しさを知り、身体の動きを通して実感を伴いながら演奏能力・創作意欲を向上させるための研究をさらに発展させていきたい。

## 引用文献

- 1) Mauricio Kagel : Concert Piece for timpani and orchestra, 【Peters.】 (1995) p.81
- 2) エドナ・メイ・バーナム／著、大島正泰／監修、中村菊子／解説・訳「バーナムピアノテクニック」全音楽譜出版社 (1975) p.8
- 3) ibid. p.16

## 参考文献

- ・塚田靖「4. いろいろな打楽器」『新版 吹奏楽講座 第3巻 打楽器 / マーチング・バンド』音楽之友社 1983 pp.107-125
- ・網代景介、岡田知之『新版 打楽器事典』音楽之友社 1994 p.163
- ・網代景介、岡田知之、松原龍一「タンバリン」『ニューグローヴ世界音楽大事典 第10巻』文献社 1995 pp.401-402
- ・高倉秋子、奥村美恵子『たのしく打楽器』共同音楽出版社 2000 p.19
- ・猪瀬雅治『やさしい打楽器教本』ドレミ楽譜出版社 2007 p.25
- ・畠澤郎『新・音楽科教育法』朝日出版社 2015 p.83
- ・竹島悟史『パワーアップ吹奏楽！パーカッション』ヤマハミュージックメディア 2016 p.36
- ・井口太、他『最新・幼児の音楽教育 幼児教育教員・保育士養成のための音楽的表現の指導』朝日出版社 2018 p.115
- ・有本真紀、阪井恵、津田正之、他『新版 教員養成課程 小学校音楽科教育法』教育芸術社 2019 p.31

